恋愛小説

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛小説

【Ｎコード】
Ｎ８１４４Ｓ

【作者名】
創離

【あらすじ】
夢を見た。
だけどその内容が思い出せない。
そんなことは誰にでもあるし、何歳になってもそうだろう。
だから気にしない。
でも、なんだか今日はいい事ありそうな気がする。
葉壁　奏　今日も一日頑張ります！

って、感じでどうでしょう？

一話　かなで（前書き）

何て言うか……テンプレ通りの恋愛小説？的な

一話　かなで

私には足りない。
『何が足りないの？』
愛が？
『それは幻想』
友情が？
『それは空想』
金が？
『それはマボロシ』
……ｅｔｃ．
私には何が足りないの？
『それは、分からない』
私にはあの人が足りない。
『あの人？』
そう、私が愛してやまなかったあの人が。
『それは誰？』
誰だっけ？
『本当に愛していたの？』
愛していたんだっけ？
『会いたい？』
会いたい。とても。
『なら大丈夫。あなたはその人を愛しているから』
本当に？
『ええ、本当に』
会える？
『明日にでも』
嬉しいな。
『私も嬉しいわ』

所で、あなたはだあれ？
『私は私。あの頃のあなたの横に居たの』
今は？
『今はココにしかいない』
どうして？
『……』
名前は何て言うの？
『……』
どこの子？
『……』
またお話しできる？
『……あなたが望んでくれるなら、きっと』
それじゃあ、またね。
『またね』

――夢を見ていたのだろうか？
分からない。
でも、なんだか気持ちいの良い朝を迎えた気がする。
今日は、いい事があるかも知れない。
「奏（かなで）ちゃん、起きてる？」
扉の前からは、叔母さんの声がした。
「今起きた」
「そう。それじゃ食事は出来てるからね」
「はーい」
私は、急いで制服に着替える。
先週から夏服なのだが、これがとても可愛いのだ。
「それじゃね」
私は、机の上のぬいぐるみに挨拶して部屋を後にする。
リビングに行くとそこにはいつも通りの朝食が用意されていた。

「頂きます」
「はい、どうぞ」
叔母さんが、5年前から変わらない笑顔で返事してくれる。
『えー、先日起きた殺人事件ですが、犯行の手口から同一犯の可能性が高く』
テレビでは、最近あった連続殺人の事をしていた。
「奏ちゃん、学校どお？」
しかし興味がないのか、叔母さんはそんな話題を振ってきた。
「どお？って？」
「そりゃ、勉強だったり、友情だったり……恋だったり！」
年甲斐もなくそんな事を
「そうだねぇ、勉強は上々、友達もいなくはないし、恋は……」
どうだろう？何か引っかかるモノはあるのだが。
「どうしたの？ひょっとして、失恋？」
「え？」
気付くと頬は湿っていた。
「あれ？何でだろ？」
「……」
私はどうして泣いているのだろう？

朝のあの件以来、今日一日私は考えていた。
涙とは悲しい時に流れる筈なのに、私は何が悲しかったのだろうか？
「かなちゃん、飛ばせー！」
私はその声で現実に戻って来た。そう、私は部活のソフトボールをしていたのだ。
皆の応援が、力になる……訳はなく空振り。
「やっぱり凄いね、相手のピッチャー」
ゆうちゃんが、そんな声をかけてくれた。
「うん、とても速かった」

実際うちのピッチャーと変わらない気がしたが、まぁ打てなかったしどっちでもいいや。
「所でかなちゃん、あそこのフェンスの所」
「ん？」
ゆうちゃんの言ったフェンスには青いパーカーを着た男が立っていた。
「アイツずっとかなちゃん見てたよ」
「私なんてみてる訳ないよ～」
きっと違うよね？
「見てたのはゆうちゃんかもしれないよ？」
「違うよ～」

部活も終わりすっかり暗くなった。
４０分かけてようやくマンションに戻ってきた。
「……」
そこには居た。さっきの男が。青いパーカーを着た男が。
「こんばんわ、奏」
誰なのだろう？
「忘れた？佐川（さかわ）　裕也（ゆうや）って覚えてない？」
「覚えてない」
覚えてない。
「そんな名前知らない」
知らない。
でも
「そうか、じゃあどうしてこんな風に」
どうしてだろう？
「抱きついてくるの？」
この男を私は愛している。

一話　かなで（後書き）

これ、連載にしたけど完結するかな？
ま、いいや
俺しーらね

二話　かなで（前書き）

前回の話はなんか……ねぇ
それでも懲りずに連載継続。
書いてるうちに上手くなってきました、的結果を御所望です

二話　かなで

『ねぇ、あの人には会えた？』
あの人って？
『あの人はあの人』
……たぶん会えたと思う。
『たぶん？』
私は私じゃないから。
『そう……そうね』
あの人は誰なの？
『誰？あなたは知ってるでしょうに』
知ってるよ。でも、知らない。
『そう……そうね』
？　今日は消極的ね。
『ええ、ちょっと疲れているの』
そう、それじゃあ最後に一つだけ訊いてもいい？
『私に答えられる事なら』
うん、それじゃあ訊くね。
『ええ』
私は誰？

――今朝は、目覚めが悪かった。昨日はあんなに清々しい朝だったのに。
「むしゃくしゃする」
「どうして？」
「！？」
声がする方向は私の机の方だった。
ひょっとしてぬいぐるみが遂に私の愛に答えてくれたのかと思いもしたが。

「おはよう、かなで」
そこに居たのは、青いパーカーを着たアイツだった。
「なんで、そこに居るの？」
「おかしなことを訊く、昨日ココに入れてくれたのは君なのに」
「……は？」
まったく覚えがない。というより普通の一般人たる自分が知らない男を部屋に上げるはずがない。
「うそだと思ってる？」
「そりゃ」
「んじゃ、証拠」
取りだされたのは、ＩＣレコーダーだった。
「聴いてごらん」
私はスイッチを入れる。
『あー、一応さっきの言葉もう一回言ってもらっていいかな』
男の声から始まった。
『良いけど、何で？』
そして、私の声が聞こえる。
『うん、明日の朝に君がこの事を忘れてた時のために一応証拠をね』
『ふーん、私があなたを忘れる訳ないのに』
ただ、問題なのは
『こんなに、あなたを愛してるんだから』
こんなセリフ言った覚えが全然ないことだ。
『裕也、家に上がっててよ』
「ほら、決定的瞬間」
勝ち誇ったように男は言った。
「ね、かなでが言ってたでしょう？　上がるように」
男は意地悪な笑みを浮かべている。
「わかったわよ。じゃあ、もう帰ってください」
『ねぇ裕也、私……もう』
レコーダーから聞こえてきた私の声に、私はあわててスイッチを

切った。
「……」
「……」
無言の間。男はさっきに増してニヤついている。
「続き、聴きたくないの？」
「聴きたくないっ！」
私は、思いっきり否定した。
「そう言えば、叔母さんはどうしたんだろ？！こんな男上げて不審に思わないはずがない！」
私は、話しかけるというよりは独り言のように呟いた。
「ん？あの人は、ニヤつきながら『ごゆっくりー』何て言ってたじゃん」
叔母さん～！姪っ子をもっと大事にして～！
「その叔母さんもさっき出かけて行ったみたいだけど」
その言葉にハッとして時計を見る。
「うそ」
時刻は9時を回っていた。学校が8時からなので完全に遅刻。
「サボりおめでとう」
「おめでとうじゃない！」
そして今から行けばサボりでもない……はず。
「着替えるから出てって！」
「えぇ～」
男は、不満そうに声をあげる。
「えぇ～、じゃない」
私は男をほおって、着替え以外の準備を始める。
「いいじゃん、今日はサボってデートしようよ」
男は後ろから抱きついて来た。
「そんな事する訳」
ないじゃない、と言えなかった。いや、それどころか
「うん、今日は終日デートね」

言ってしまった。自分の心に浮かんだ言葉を口にしてしまった。
「じゃあ、朝食準備して待ってるね」
裕也はそう言って部屋を後にする。
「裕也の食事久しぶりだね」
「楽しみにしてな」
私は、心躍らせながら着替えを始めた。

私は動物園に居る。
「かなで、こっちにおいでよ」
この男と。
「あなた、催眠術でも使えるの？」
「何だいきなり？」
朝の事は途中からうろ覚えだが、何かとんでもない事を言った気がする。
「使えたらいいなぁ、とは思うけど」
「つまり使えない訳ね」
「まぁ、一般人だし」
当然と言えば当然。
「でもなぁ」
「どうしたの？　楽しくない？　動物園は好きだった思うけど」
「いや、まぁ好きだけど」
なぜそれを知っている？
「よかった～。この5年で嫌いになったのかと思った」
「……」
「あっちにカバがいるみたいだね。行ってみようか」
まぁ、楽しいしこの男については後で聞くとにしよう。

さて、今日のデートで分かった事を報告しておく。
今日のデートでこいつが喧嘩した時の事だ。喧嘩の理由については、簡単に言うと私がナンパされてこいつが混ざって来てゴタゴタ

あった。というレベルの事だ。
「おい、汚い手でかなでに触るな！」
というセリフが決め手になった事も言っておこう。
まぁ、そんな感じで喧嘩に発展した訳だが、相手は3人いた。そんな中勇敢に立ち向かってくれたことも嬉しい。
だがこいつは異様に弱かった。相手の攻撃を全弾華麗に喰らっていた。タフと言えばタフだが、ついさっき倒れてしまい、その所為でココのベンチから離れなれなくなってしまった。
「はぁ。弱いのなら喧嘩なんか売らなきゃいいのに」
「そうは言うけどねぇ」
私が起きていた事に驚くと
「俺は、どのくらい気を失ってた？」
と訊いて来たので
「5分くらいかな」
と、答えた。
「あなた」
「裕也って呼んでよ。デートした中だろ？」
「……裕也、自分が勝てないって分かって喧嘩売ったでしょう」
「うん」
即答する。
「なんで？」
「そりゃ、好きなこの前でくらい良い顔したいじゃないか」
そう言うと目線をそらした。
「そうは言うけど私は裕也を知らないし、あったのは昨日よ？ストーカー？」
「ストーカーねぇ」
裕也はこっちに視線を戻してくる。
「5年前」
「え？」
裕也は語りだす。

「俺はお前ら二人に約束した。かなでを幸せにするって」

二話　かなで（後書き）

これで、それっぽい展開かな？
恥ずかしいので読み返して訂正したりとかはしないです。
一発勝負の作品。
その所為でおかしなところはそのままにｗｗ
しかし、懲りずに次に続くのであった

三話　ゆうや（前書き）

視点変更の回です。
判りづらいかもなので一応書いておきます

三話　ゆうや

今日もかなでの家に来た。
いや、今日は連れてこられたという方が適切だろう。
「で、今日の言ってた話聞かせてよ」
「ん？君たち二人の話？」
「そう」
俺たちはあの後『外でする話じゃないだろう』と言ってかなでの家に帰って来た。
「その前に、かなでの記憶について確認しておきたい」
「私の記憶？」
「あぁ、例えば五年前の事故の事」
「……」
「どのくらい覚えてる？」
「……まったく。あの時の新聞とか叔母さんの話とかで知識としては知ってるけど、覚えてはいない」
「ふーん、それじゃあ葉壁深奈津（はかべ みなつ）については覚えてる？」
「さぁ？私と同じ名字だけど、誰？」
「同じ名字なのは偶然だ。そうだね、五年前の事故、その時の唯一の死者だよ」
「！？そんな筈ない、だって死者は0だって新聞に」
「その新聞はこれかな？」
俺は鞄から新聞の切り抜きを取り出す。
「五年前の7月……これよ」
「よく見てごらん、ここ死者は1名って」
「うそ、そんな筈……」
そう言って新聞を覗き込むと、かなでは頭を押さえこんだ。
「大丈夫か！？かなで？」
「だ……いじょう…ぶ」

そうして１０秒が経った。
「……やっぱり死者は０人って」
「……そうか」
そこには確かに『死者１人』と書いてあった。
「まぁ、その時かなでと一緒に事故に遭ったのがみなつだ。かなで達は親友だった」
「親友だった？でも私は」
「事故の所為で記憶に異常をきたしてるんだ。現に俺の事も忘れてただろう」
そう言うとかなではバツが悪そうに目を背けた。
「それは良いんだ。俺の話は俺とかなでとみなつ、その３人で事故の１週間前に約束をした。それだけの話だ」
そう、これから話す話はただそれだけの話。

事故の１０日前、俺はみなつに呼びだされた。
「今日は皆でヒーローごっこをしましょう」
小学５年生だった俺らは毎日のようにつるんで遊んだ。それぞれ他に友達がいなかった訳ではなかったが、『家が近い』それだけの理由で学校でもつるむ事が多かった。
「みなつ、またアニメでも見たのか？ヒーローごっこて幼稚園生かよ」
みなつは、テレビに影響されやすくその所為で巻き込まれるのは俺とかなでだった。
「違うの、みっちゃんが見たのは戦隊モノの特撮だよ」
かなではこんな風にみなつのフォローに回る事が多かった。
「いいじゃん、幼稚園生の気分に戻れ！私はやるんだ」
いつもこんな感じで３人で遊んでいた。
そんな風にいつも通り遊んでいる途中に俺は気付いた。
（あれ？なにか違う）
そう、今なら分かるがその時はかなでとみなつの二人はお互いを

意識しあってる風だった。その所為でいつもと違う空気が場に流れていた。
「かな！喰らいなさい！私の超ウルトラ必殺パンチを！」
「みっちゃんこそ！私のハイパーデンジャラスキックを喰らえ！」
二人は確かチョップを繰り出したと思う。横で「チョップじゃん……」と言った記憶がある。そして二人の攻撃はお互いにクリティカルヒットした。
「おい！大丈夫か？！」
そのあまりに綺麗に決まったチョップに俺は心配になり俺は駆け寄った。
「かな、やるじゃない」
「やっぱりみっちゃんには敵わないか」
そう言ってその場は収まったが、次の日にかなでは学校を休んだ。事故の8日前、一日休んだだけで済んだかなでにみなつは皆が呆れるほど謝った。
「ごめん！ホントにごめん」
「いいよ、私もみっちゃんを殴ったしお互い様だよ」
その後、なんとかみなつを説得したかなでとみなつでその日も遊んだ。その日は人生ゲームをしたと思う。でも結局ゲームの結果はうやむやになってしまった。俺が言った一言で場を悪くしたからそれは覚えてる。
「そうだ、皆に伝わる前に二人には伝えておくよ」
「「え？なにを？」」
「うん、俺転校することになったんだ」
「え？」
「なんで？」
え？と言ったのがかなでで、なんで？と言ったのがみなつだった。この辺の反応の差は性格ゆえだろう。
「父さんの都合で、東京に行くんだ」
「そんな」

その後は誰も声を発さなかった。そして時間が過ぎて、その日は別れた。
事故の1週間前、その日は休みの日で朝からみなつに呼びだされた。
「「転校するまで後1週間あるのよね」」
家に入るとかなでとみなつで声を合わせて訊いてきた。
「え……あぁ」
「それじゃあ後1週間、遊びつくしましょう！」
「あのね、3人で思い出いっぱい作るの！でね、また遊べるように、かなでの事とかみっちゃんの事とか忘れないように！いっぱい遊ぼう！」
小学五年生にしては子供すぎる考えかもしれない。でも、二人にそう言われた時俺は泣きそうなくらい嬉しかった。
「あ、あぁ！まぁ、こんな事しなくっても『俺は』絶対に忘れないけどな！」
「あぁ！その言い方私たちは忘れるみたいじゃん！」
「そうよ！私だってこんな事必要ないわよ！」
「さぁ、それはどうだろう。かなではともかく、みなつは忘れっぽいからなぁ。転校して次の日には忘れてるんじゃないか？」
その後、みんなで日が暮れるまで遊んだ。何をしたかなんて覚えてないくらい色々した。いつもより長く遊んでさすがに帰る時間になった。
「ねぇ、ゆうくん」
「なに？」
「転校する前に一つお願いがあるの」
「なに～？かな、裕也に何をさせるつもり？」
「みなつは少し黙っとけ。　で、かなでお願いって？」
「うん、あのね……その…」
「……」
「なんだ？」

その時の、みなつは怒っているように感じられた。いや、事実怒っていたと思う。
「だからね……」
「ええーい、イライラする！こっちに来なさい！かな」
そう言って、みなつはかなでを連れて行った。
「裕也は待ってなさい」
と言って。
それから3分くらいして戻ってきた。
「さぁ、かな。今こそ言ってやるのよ！」
「うん」
そう言ってさっきに増して赤くなった顔で早口にかなでは言った。
「ゆうくん、転校して遠くに行っても！いつか！いつか帰って来てかなでをお嫁さんにしてください！」

三話　ゆうや（後書き）

私はまだまだ懲りません。
前作についても反省なんかしてない！
俺は、間違ってなどいなかった。
ということで、恋愛小説第3話完

四話　かなで（前書き）

もう、前書きに書く事もなくなってきました。

四話　かなで

ねぇ、本当に？
『なにが？』
本当にあの人は約束を果たしに来たの？
『そう』
でも、あんなに昔の事なのに？
『彼はそういう人だったじゃない』
そうかしら？
『……話の続きは今度にしましょう』
どうして？
『あなたはまだ、思い出していないから』
それは

――私はどこに居るのだろう。
「……」
私は、知らないベットで寝ていた。
私の隣にパイプ椅子で寝ている叔母さんがいる。
「かなで、起きてたのか？」
あたりを見渡して声の主を探すと、部屋の入口に立っている男がいた。
「ゆう……ちゃん？」
「ん？なに？」
「何で私、ココどこ？」
「ココは病院。昨日昔の話してたら、いきなりかなでが倒れて吃驚した」
どうも私は倒れたらしい。
「昔の話？」
「……そう、昔遊んだ話とかだよ」

違う、そう分かる。
「違う。昨日した話は、もっと重要な……」
頭が割れるように痛い。
「おい！かなで！」
「ゆうちゃんと、みっちゃんとした、約束の話」
ゆうちゃんが何か言ってるけど聞こえない。
「ゆうちゃん、昔みたいに……5日間だけだったけど…みっちゃんみたいに……かなって呼んで」
ゆうちゃんはそれでも何か語りかけてくる。
「そしたら、思い出せそうなの」
いいかんげん、限界かもしれない。頭が痛い。気を失いそうだ。
「かな！もういいから！忘れたままでいいから」
ゆうちゃんはそう言ってくれた。
『かな！いいから！あいつのことはほっとけ！』
突如、そんな言葉を思い出した。
「分かった。思い出した」
「え？」
「あなたは佐川裕也。葉壁深奈津がみっちゃん。私たちはずっと3人だった。あの時した約束は」
気付くと頭の痛みは引いていた。むしろ清々しい気持だった。
「たとえ遠くにいっても！いつか必ず帰ってきて、私を幸せにしてくれる約束！」
そこには、少し驚きながらも嬉しそうにするゆうちゃんと、訳が分からないと言った感じで一部始終を見ていた叔母さんがいた。

「ええ、もう退院してもいいでしょう」
あれから4日、私はようやく退院することになった。（記憶が戻った時点で、今まであった性格の入れ替わりなどの精神の不安定な部分は埋められたらしく退院してもよかったらしいのだが）
「お大事に」

そう言われて私と叔母さんは病院を後にした。
「今日は退院祝いよ！何か食べたいものはある？」
「えーと」
叔母さんに訊かれて私は悩んでしまう。
「じゃあ、お肉」
まぁ、この辺が妥当だろうと思い口にした。
「おっけー、そんじゃ行こうか」

家に帰って部屋に入ると、部屋が凄まじい事になっていた。
「なに？これ」
部屋は片づいていた訳ではないが決して散らかっていた訳でもない。
しかし、
「あり得ない」
そう思わせるほどに部屋は荒らされていた。
「奏ちゃん？荷物置いたら来て、って……」
私の部屋の惨劇を見て叔母さんの声が止まった。
「叔母さん、警察に電話してくるわ！」
部屋を見渡すと壁に大きく文字が書かれていた。
「みつけた……？」
赤い塗料で書かれていたその文字からは、憎しみしか伝わって来なかった。

四話　かなで（後書き）

結局、今回書きたかった事は書けなかった。
たぶんタイミング逃したし、もう書けない。

五話　ゆうや（前書き）

もう、ほんっとにグダグダになってきた。
あぁ、これ誰か読んでるのかなぁ？

五話　ゆうや

例えば、エンピツと言うモノがある。
あれは研ぐ事によってモノを書くことができる。
人の感情もそれと同じだと言ったのは誰だだったか。誰も言ってないのかもしれないがそんな事はどうでもいい。
もし、長い間感情を研ぎ澄ます事が出来たらそれはもう止められるものではないのかもしれない。俺のかなでへの愛情の様に。
ただ、世間一般の認識でも知られている様に、愛情は憎悪へと変わりやすい。
愛と憎しみは表裏一体。そんな陳腐な真実は例え陳腐であろうと真実なのだ。
前置きが長くなった。要するに何が言いたいかと言うと。
かなでが危ない。そういう事が言いたかったのだ。
『あいつ』の愛は時間だけを見れば俺の愛の比ではない。それこそ物心ついた時から今現在までの愛なのだから。
『あいつ』は物心ついた時から俺へ好意を寄せていた。これは自意識過剰などではなく本人からの自己申告である。
好意を研ぎ澄まし愛へと変え、その愛は向ける方向を変えることで憎悪へと変わる。この五年間冷めることなく研ぎ続けた愛はもう狂気と言っていいのかもしれない。狂ってる。
だから、その愛情がかなでに向いたとき俺は怖かった。と、同時に引っ越してかなでから離れる境遇に感謝した。
「なんて、考えてる場合じゃないか……」
全身が痛い。『おしおき』が終り１０分は経っただろうか？ようやく痛みに慣れてきた。
「ココまでやるとは、本当に」
まったく、我が妹ながら
「狂ってる」

懐が振動する。どうやら携帯は無事だった様だ。良かった、機種変したばっかだったから。
「えーと、相手は、かなで」
そうか、かなでなら出なくても。
「かなで？！　ナイスタイミング！」
起き上がると全身が痛かった。本当に泣きたい。でも、泣いてる場合じゃない。
「かなでか？　大丈夫か？　無事か？」
『ゆう君、どうしたの？　いきなり大きな声出して』
「あ、あぁ。悪い」
確かにいきなり大声出したのはまずかった。
『でも、大丈夫かって訊いてくるって事は、これしたの誰か知ってるの？』
「……何があったんだ。今どこに居る」
『うん、さっきまで警察に居たの。今日ね帰ったら、部屋が荒らされてて。おっきく赤で「見つけた」って』
間違いない、妹の仕業だ。
「とりあえず会おう。今どこに居る？」
『今、家に居るよ。部屋を片付けてるの』
「今から行く」
俺は、携帯を切り取りえず体中の痣が見えない様に服を着替えて部屋を後にした。

五話　ゆうや（後書き）

さぁ、僅か４話で二人の問題を片づけてしまったばっかりに新しい問題を作りました。まだ先の予定だったんだが。
やっぱりもっと引っ張るべきだったな。
まぁ、次は上手くやるさ。

六話　かなで

おはよう
『おはよう』
おはようなのかな？
『そうね、違うかもしれないわね』
まぁ、いいか
『ええ』
所で、あなたはどこまで知っているの？
『どこまで？』
私の事……私たちの事
『どこまで、と言うなら5年前の事まで』
5年前……。でもあなたは再会のあの日の事も知っていた。
『違うわ、知っていた訳じゃないの』
知っていた訳じゃない？
『あれは偶然。あなたの事を見ていられなくなって、気休めで言っただけ』
本当に？
『ええ』
うそ？
『そうね』
やっぱり。
『私もあの人の事はずっと見ていたから』
そうか。
『そろそろお別れみたいね』
そうなの？
『そうなの』
そう、それじゃバイバイ。みっちゃん。
『ええ、さようなら。かな』

――「かな？　大丈夫か？」
起きて早々そんな事を聞かれた。
「どうして？」
「泣いてるから」
私は、頬に手を伸ばす。
「ホントだ」
「やっぱり今回の事は効いたようだな」
「？」
私は部屋を見渡し、ゆう君が言ってる事に気付く。壁一面に書かれた赤い文字。昨日ゆう君に手伝ってもらい部屋は片づいたが、壁の文字は消せなかった。
「違うよ」
「何が？」
ゆう君は首をかしげる。
「私が泣いてた理由」
私は、最近あった内容を覚えてない夢、その内容を覚えていたし思い出した。おそらくこれが最後になるからだろう。
「夢でね」
『またね』ではなく『さよなら』だったから。
「友達とお別れしてきたの」

今夜は、ゆう君はいない。何でもお仕事があるそうだ。
夜間外出は避けるように言われたが、叔母さんは仕事なので夕飯の買い出しに出るのは仕方ないだろう。いや、夕方行けばよかったんだが、女子には色々あるのだよ。……寝たりとか。
「はぁ、疲れたなぁ」
はっきり言って重い。ちょっと買い過ぎた。
「こんばんわ」
後ろから声がかかる。

「え？」
そこにはフードをかぶった人がいた。性別までは判断できない。
「こんばんわ！」
そう言って、手に持ったハサミを突き立ててくる。
「うわ！」
「ちっ」
私は必死に避ける。
「こんばんわ、奏さん」
不審者は、私の名前を呼んだ。
「メッセージは気に入ってもらえましたか？」
「メッセージ？」
「ええ、部屋に書いたんですけど」
あぁ、あの趣味の悪い
「『みつけた』ってやつ？」
「ええ、2週間探しましたよ。兄は1ヶ月くらい探したみたいですけど……まぁ、先にこっちに来てましたからね」
「葵ちゃん……だよね」
フードをかぶっているが、口ぶりからして間違いないだろう。
「ええ」
そう言いながらフードを取る。
「久しぶりです。奏さん」
「久しぶり」
「そう身構えないでください。殺そうって訳じゃないんですから」
「ハサミを突き立ててきた人間が言っても説得力無いって」
「あぁ、これですか」
葵ちゃんはハサミを道路の脇に投げ捨てる。
「これでいいですか？」
「……何の用かな？」
「いえ、世間話でもするついでに死ねばいいなって」
どうにも昔から変わらないな。この子は。

「でも、奏さんは変わりましたね」
「何が？」
「昔は苛められっ子オーラ全開だったのに、今は体育会系オーラ全開じゃないですか」
「あぁ」
事故で一回人格リセットされてるからね。
「最初見た時は、別人かと思いました」
「昔の知り合いにはよく言われたな」
ゆう君ぐらいからしか言われてないけど。
「まぁ、バット振ってボール投げて、暴力的になっても兄の愛情は変わらないみたいですけど」
「羨ましい？」
あ、挑発はこの子には禁句だった。
「別に」
あれ？　この子もずいぶん変わったようだ。昔だったらハサミ拾って切りつけてきた。
「所で、奏さん」
「何かな？」
「裕也から離れてください。今後近づかない用に。今日はその警告だけをしに来たんです」
「彼の方から近づいて来るんだけど？」
「一言『近寄らないで』とでも言えば来なくなるんじゃないですか？まぁ、1週間後まだ兄の近くに居るようなら」
そう言いながらハサミに近づく。
「こんなものじゃなく、ちゃんとした武器で全身穴だらけにしますから」
怖すぎるよ。葵ちゃん。
「それじゃ、ごきげんよう」
私より背の高い、武闘派の女の子は来た方向に向かって姿を消して行った。

六話　かなで（後書き）

こんな感じで進みます。
特にバトル物の展開にはなりません。
そういう場面では、かなでは一方的に切りきざまれます。
相方の裕也も役に立ちません。

七話　かなで（前書き）

つづきだよ！

七話　かなで

思い出せない事はない。
5年前の事故、その時の記憶。
思い出そうとすると体は嫌がるが、ちょっと昔みたいに幻覚が見えたりだとか、そういう過剰反応はしなくなった。
ここで、5年前の事を少しだけ語りたいと思う。
5年前の葵ちゃんについて。
と言っても、葵ちゃんとの出会いはそこまで長くはならない。あったのも5年前には2，3回位だろうか。
とは言うものの、劇的な出会いだったのは間違いない。なんせ、しょっぱなから睨み殺すような視線で見つめてきたかと思えば
『……殺す！』
っだったから。
いやー、出会って2回目でペティナイフを持ってきた子は、後にも先にもあの子だけだよ。
葵ちゃんが極度のブラコンだと言うのは、この日の最後に聞いたことだったかな？
と言っても、この次の日には引っ越して行ったから葵ちゃんの事をそこまで知ってる訳じゃない。
せいぜい、最後に赤く塗った包丁を渡された事位か……。いやー、あの後1週間くらい寝つきが悪くて親に怒られたのを覚えてるよ。
そんな葵ちゃんだから、昨日の脅し文句を冗談とはとらえない。彼女は殺るね。私を。
と言っても、私だってゆう君から離れるつもりは毛頭ない。ようやく手に入れた幸せをみすみす手放すつもりはない。
「……でもなぁ」
彼女相手に生き延びる自信がない。
「どうしようかなぁ」

ピーンポーン

呼び出しのチャイムが鳴る。

「はーい」

私は玄関に向かって走る。

「どなたですかぁ？」

ドアを開けるとそこには意外な人物……本当に意外な人物が立っていた。

「こんにちは、奏さん」

噂をすればなんとやら、いや、これはさすがに絶句するしかない。

「奏さん？」

返事がないのにイラついてナイフを出さない！

「え、っと、葵、ちゃん。だよね？」

「他に誰に見えるんですか？　目が悪いなら少し診てみましょうか？」

ナイフが少し上を向く。

「うん、大丈夫。所で何の用かな？」

「はい、少しお話しておきたい事がありまして。とりあえず、あげてもらっていいですか？」

私は言われるがままに彼女を部屋にあげた。

「これお茶とお菓子」

「ありがとうございます」

葵ちゃんは、お礼を言いながらお茶に手を伸ばす。

「我ながら、これは上手く書けました」

そんな事を壁の文字を見ながら言った。

「これ、練習した次に日に書いたんですよ。割と難しんですよ？スプレーで文字書くの」

「うん、わかるよ」

昔テレビで言っていた気がする。
「でも、用事はそんな事じゃないでしょ」
「そんな事だなんて、酷いですね。でも、まぁその通りですね」
葵ちゃんはこっちに体を向ける。
「ペンチ、金槌、木槌、ニッパー、ハサミ、出刃包丁、千枚通し、違法改造エアガン、ラップの切る部分……ｅｔｃ．」
「何かな？」
大体分かるが。
「今日持ってきた道具です。でも、今日はこれを使うつもりはありません。１週間の約束ですから」
そう言って、鞄をこちらに寄こしてくる。
「一応、使い方が分かりやすい物を選んできました」
開けてみると、先ほど羅列された道具が入っていた。
「基本違法改造してあったりしてますから、持ち歩く時は気を付けてください」
「持ち歩かないわよ」
くすくす、と笑う葵ちゃん。
「まぁ、私からの気持ちですから」
「どんな気持ちよ」
まさか、危ない物を持たせて警察にでも通報するつもりなのかな？
「今日のお話もあんまりないんです」
「だろうね」
「最近現れた、連続殺人犯知ってます？」
「知ってる」
なんか、キラーだかキリングマンだか、そんな名前だった。
「その殺人犯は、夜に女子高生を襲うらしいですよ。運動部の帰りだとかに」
葵ちゃんは何が言いたいのだろうか？
「１個目の話はそれで終わりです。まぁ、気をつけて殺されてください」

なんじゃそりゃ。
「2つ目は、兄の事です」
「まぁ、1つはそうだろうと思ってたけど」
「いや、これはやめておきましょう」
そう言って立ち上がる葵ちゃん。
「まぁ、1言だけ兄に伝言を。さすがにあんなことした後じゃ言いずらいんで」
ドアに向かって歩きながら言葉を紡ぐ。
「なにかな？」
「『あなたは私に狂ってると言いますが、私から見ればあなたの方がよっぽど狂ってる』とお伝えください」
「……了解」
そう言って、葵ちゃんは我が家を後にした。
ただ、鞄を置いてかれても……使えってことなの？
そして、殺人鬼の話はなんだったんだろう？　実は自分が殺人犯でお前を殺す準備は着々と進んでぞって言うことかな？
なんだか、良くわかない事だらけだよ。葵ちゃん。

七話　かなで（後書き）

恒例の弁解ターイム。
いや、もううざったらしいほど弁解しますよ。
まず……あー、もう言葉を紡ぐのもやだ。
みんな！　察して！
もう、察して！

8話　かなで（前書き）

久しぶりのｕｐです

8話　かなで

どうしてなんだろう？
どうしてこう、私は不幸なんだろう？
薄幸、と言う方が当たり障りのない言い方か。
「かな、悪いな」
私は、私の部屋で監禁されていた。
「ねぇ、ゆう君。理由聞かせてくれるかな？」
首にナイフがあてられる。
「お前が好きだからだよ。何て言ったらやっぱり引くか？」
大真面目な顔でゆう君は告げた。
「ははは、妹にも引かれちゃってさ。お仕置きなんか受けちゃったよ」
「ゆう君が、ニュースで言ってた殺人鬼なの？」
「いや、違うんだけど。まぁ、無関係じゃない」
言いながら、ナイフを持ち直す。
「この辺の高校生に一番詳しいのは誰だと思う？」
ゆう君はニヤつきながら取り出した凶器を向けてくる。
「あの変態野郎なんだよね。あいつこの辺りの女子高生の名前と顔全部覚えてんだぜ。で、かなの住所とか調べてくれるように頼んだんだ」
ばたん
扉の開く音がした。
「そこまでよ！　武器を捨てて！　お兄ちゃん」
そこに居たのは葵ちゃんだった。

「折角武器を渡しておいたのに、逆に利用されるなんて。体育会系になったんじゃなかったの？」
「せめて金属バットが入ってればね」
関係ないだろうけど。
「で、葵。何しに来たんだ？」
「兄の更生に協力しに。女に狂った兄は要らないんです。だから更生させてあげようかと思いして」
「どうやって？」
「こうやってです」
葵ちゃんはゆう君に向かって走り出す。
もちろん、舞踏派の葵ちゃんから逃げられる道理もなく、ゆう君は捕まり床に押し付けられる。
「んっ」
その瞬間、葵ちゃんはゆう君の唇に唇を重ねた。
「ちょっ！　葵ちゃん？！」
「んっ」
キスしながらこちらに目を向ける葵ちゃんは少し怖かった。
「……っぷはぁ。……お兄ちゃん私はね、あなたが普通に恋愛する分には口出ししないつもりでした」
「……はぁ…はぁ」
呼吸を止められていたせいか息が切れている。
「でも、狂うのなら話は別です。狂うのなら……」
そうか言う葵ちゃんの目には、うっすら涙が溜まっていた。
「……どうしていつもこの女んだよ！　あんたの傍にはずっと私がいたじゃねぇか！　こいつよりもずっと前から！　こいつよりもずっと！　5年越しの愛？　聞こえは良いかもしれねぇ！」
口調が変わるほど興奮する葵ちゃん。
「けどそんなの、異常なだけだ！　違うだろ？　あんたはいつだって正常であろうとした。私に対して何処か一線引いてた！　なのに、どうしてこいつにだけは……こいつに対してだけは……」

そのまま崩れ落ちる葵ちゃん。

バン！

玄関のドアが開く、いや、弾け飛ぶような音がした。
「？！　おい！　葵、お前どこから入った？！」
「え？！　玄関からだけど」
「鍵は？！」
「してない」
足音が近付いてくるのが分かる。
「ちっ！」
ゆう君は上に乗る葵ちゃんをどかし、ナイフを拾った。
「葵。今から来るやつはマジでやばい。逃げる準備をしておけ」
「え？！」
葵ちゃんは訳が分からない用だったが、すぐにハッとして。
「もしかしてあいつ？」
足音は部屋のドアの前で止まった。
「来た」
瞬間、ドアが蹴破られ、そこには頭はニット帽、顔はマスク、服は白衣らしきもの、そして手には包丁が握られていた。
「何？」
「はぁはぁ、奏ちゃん。救いに来たよ」
危ない、目で分かる。これは、本気でヤバい。
「そこの男が君をこんな世界に……だけど大丈夫…僕が」
「お兄ちゃん、こいつ本気でヤバい。こんなのとつるんでたの？」
ゆう君は無理に笑い
「あぁ、俺もこんなのとつるんでたかと思うとゾっとする」
「あれ？　知らない子もいるけど……君も女子高生かな？　奏ちゃんと一緒に救ってあげるね。でも。その前に」
勢いよく振りあげられた包丁は、ゆう君に向かって下された。

「お兄ちゃん！」「ゆう君！」
「くっ」
包丁は頭をかすめ肩口に食い込んだ。
「やめろ！」
横に振られたスパナは男をかすめ、ゆう君にヒットし、ゆう君は気を失って倒れ込む。
「いけない子だなぁ。お仕置きしなくちゃ」
「……い、や」
葵ちゃんの目は、男ではなくゆう君をとらえていた。
「大丈夫だよ、葵ちゃん。ゆう君は生きてる！」
呼吸が聞こえる、と言うよりも明らかに死んでない。
「だから、逃げて！」
逃げて！　私は私に敵意を持った彼女に『逃げて』とそう叫んでいた。
「葵ちゃんって言うんだね。可愛いなぁ」
その目は悪意に満ちていた。敵意ではなく悪意。そして、その先に映るのは呆然とする葵ちゃん。
「大丈夫、僕が救ってあげるから。怖がらないで」
「だ……黙れ。屑が」
絞り出すように出されたその声は、力強く響いた。
「かなでと葵に指一本触れてみろ！　殺すぞ！」
「あぁ？！」
男がゆう君に向かう。
「なんだって？！　もう1回言ってみろよ！」
男の足が傷口に突き刺さる。
「僕が2人を助けるんだ！　こんな腐った世界から救ってやるんだ！　邪魔すんじゃねぇよ！」
包丁が振りあげられる。
たーーん

気付くと包丁が吹き飛んでいた。
「お兄ちゃん、だい……丈夫？」
葵ちゃんは恐る恐る聞いた。
「あぁ、助かった」
「葵ちゃん？！」
部屋に響き渡る声。それは男の物だった。
「何してんの？！　折角君を救ってあげようと！」
「ふざけないで！」
私は叫んでいた。
「何が救うよ！　ゆう君にこんな事して、葵ちゃんに手を出そうとして！　ここから出て行って！」
「……違うよね？　君はそんなこと言う子じゃないよね。体育会系だけどどこかおとなしくて、清楚な女子高生だよね？」
男はゆう君がさっきまで握っていたナイフを拾う。
「そうか、こいつがそう言わせてるんだね？」
男は敵意をゆう君に向ける。
「お兄ちゃんに近ずくな！」
葵ちゃんがエアガンを乱射するが男は意に介さずゆう君に近づく。
「葵ちゃんも、こいつにそういうことさせられてるんだろ？　待っててね、すぐに呪いを解いてあげるから」
「うそ、これ違法改造してあるんだよ？　何で？」
全弾打ち尽くした所で葵ちゃんは腰を抜かした。
「死ね！」
ナイフはゆう君の左手に刺さる。
「ぐぁ！　……あお…い……かなでをつれ…て、逃げろ！」
もう無理だと判断したのか、逃げるように指示するゆう君。でも、葵ちゃんは腰を抜かしているし、私は縛られたまま。逃げられないし、それ以前にゆう君を置いて逃げるなんて選択肢は私と葵ちゃんの中には存在しない。

「あ、あ……あ」
葵ちゃんはもう何もできそうにない。なら。
「やめろ！　この屑野郎！」
なら、私がなんとかしなくちゃ。
「奏ちゃん？」
私は動けない。なら、男に届くのは私の言葉だけだ。
「清楚な女子高生？　なに妄想に浸ってんだ！　屑野郎！　仮にも女子高生だよ？　清楚な訳ないじゃん。おとなしくしてるのも、その方が男受けがいいからだよ」
「奏ちゃん、何言ってんの？」
「なんなら、ヤッた時の事、事こまかに実況してやろうか？　そうだなぁ、一番新しいのは一昨日か。町のサラリーマン相手に援交したんだけどさ」
「お前は誰だ？」
「誰って、葉壁　奏だよ。そうだ、どうせ警察に捕まるんだし、記念に1回ヤッとく？　別に私は」
「違う！　お前は奏ちゃんじゃない！　奏ちゃんはそんなこと言わない！」
よし、男の注意がこっちに向いた。後はゆう君がどうにかしてくれる事を祈るばかり。私はゆう君に目配せで合図を送る。
「もう君は救ってあげない。ここで普通に殺す」
「だまれぇ！」
ゆう君が男の上にのしかかる。
「くそっ！　なんなんだお前は！」
男はナイフを使おうとするが、ゆう君の肩に深く刺さりうまく抜けないようだった。
「ちくしょう！　……ふん！」
男はさっき飛ばされた自分の包丁を取ろうと手を伸ばす。
「させるかぁ」
「お前らを。殺さなくっちゃ」

ゆう君も必死に手を伸ばすが、肩やらてやらに傷がありうまくいかないようだった。
「ゆう君、がんばって！」
「ぐおおおお」
男の手が包丁に届いたその瞬間

ガン！

黒い塊が、男の手をえげつなくつぶした。
「お兄ちゃん、私やっぱり奏さん嫌いです。5年前はグジグジして嫌いだったけど、今は五月蠅いし、5年前よりお兄ちゃんが好きな理由が分かる気がするし」
強がりを言っても、やはりその脚は震えていた。
「じゃ、その鬱憤ぶつける場所があるだろ？」
「はい」
葵ちゃんは男の頭に向かってエアガンを叩きつける。

8話　かなで（後書き）

とりあえず、次回のエピローグで最後になります。
行き当たりばったりの作品でしたが、学ぶことも多かったように感じます。

てなことは、書き終わって報告に書こう……

てか、やっぱり読み返しちゃだめですね。
今まで1番酷い。
もうぐちゃぐちゃｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8144s/

恋愛小説

2011年6月12日00時43分発行